



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

2020年度 国語科実践報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西村, 諭, 浅井, 悦代, 宇佐見, 尚子, 影山, 諒, 杉本, 紀子, 西本, 麻知子, 山根, 正博 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173370

2020年度 国語科実践報告

Practical Report of Japanese Language Division for 2020

国語科 西村 諭・浅井 悦代・宇佐見 尚子・影山 諒
杉本 紀子・西本 麻知子・山根 正博

要旨

国語科の2020年度の取り組みとして、表に示したように、学年ごとに概念を主軸とした単元設計に基づいて実践した。MYPにおいてはKey ConceptとRelated Concept、Global Contextまたそれらに基づいた探究の問いを生徒と共有して授業を進めた。また、オンライン授業や他教科との連携を図った実践も行った。

1章 教科としての取り組み

1節 はじめに

新学習指導要領の公示を受け、本校では「国際バカロレア(以下、IB)の趣旨に基づくカリキュラム・マネジメント」の実践的研究を行っている。カリキュラム・マネジメントの中では、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、教育内容を組織的に配列することが求められている。今年度もこの趣旨を踏まえ、昨年度に引き続き「研究グループによる授業研究」を設け、テーマである「知の統合を生み出す探究的な学び—国際バカロレアの教育システムを活かした教育実践—」をもとに「学習の転移」や「知の統合」をめざす授業を、他教科とも連携しながら検討し、実践した。その具体的な実践内容については、各研究グループの報告を参照されたい。

2節 2020年度国語科実践記録(2021年1月末現在)

国語科では毎年本紀要に当該年度の実践(1学期までまたは2学期まで)を一覧として掲げてきた。本年も1月末までの実践単元一覧表を後掲(図1～3)する。本年はCOVID-19の影響により、1学期はオンラインによる授業となったため、当初の計画通りに進められなかったところもあったが、2学期以降はおおむね計画通りに授業を行うことができた。1学年～4学年まではMYPに基づくため、MYPにおいて単元設計に必要とされている、Key concept(重要概念)、Global context、Statement of inquiry(探究テーマ)と使用教材を記載した。5学年・6学年においてもできるかぎりMYPの重要な要素を踏まえて単元設計を行っているが、表には記載していない。

図1 <1年～2年 実践単元一覧>

学年	科目	単元	Key concept (重要概念)	Global context	Statement of inquiry (探究テーマ)	使用した教材とその著者（教科書教材には下線） (副教材・参考資料として使用したものも含む)	
MYP 対象 学年	1 (中1)	国語	文章の読解と分析を通して、筆者のものの見方を探る。	ものの見方	空間的・時間的位置づけ	文章からは、それを書いた人の意識だけでなく無意識もある程度読み取ることができる。	小関智弘『ものづくりに生きる』(説明・評論)
			自己表現(スピーチ、朗読)	コミュニケーション 創造性	個人的表現と文化的表現	受け手に伝わるようなスピーチ、朗読には経験や物語に対する明確な解釈と創造性が必要である。	向田邦子『字のない葉書』(随想)
			テーマについて考えよう。	ものの見方 創造性	個人的表現と文化的表現	物語を読むことは作り手と読み手が物語上で関わりを持ち、新しい世界を作り出すということである。	吉橋通夫『ぬすびと面』
			言葉を通して昔の人が見ていた世界を味わおう。～『百人一首』秋の歌の鑑賞	変化	空間的・時間的位置づけ	「変化」は自らの世界観を揺さぶり、新たな可能性を開く。	『小倉百人一首』秋の歌
			登場人物の関心に注目して物語を読み解こう。	関係性	アイデンティティと関係性	人間同士の関係性を「象徴」としてとらえることで、物語や現実世界に与える影響について分析することができる。	ヘルマン・ヘッセ著、高橋健二訳『少年の日の思い出』
			文法	システム	空間的・時間的位置づけ グローバル化と持続可能性	文法を学ぶことは、自分の思考や無意識について知ることにつながる。	楽しく学べる文法ノート
	2 (中2)	国語	百人一首の歌合わせ	文化	個人的表現と文化的表現	関係性を明確にし、比較することは作品の文化的な価値を高める	百人一首
			言葉の力に気づく	ものの見方	空間的・時間的位置づけ	言葉はものの見方に影響を与え、視点を変えさせる	忌み言葉・小説「言葉の力」(大岡信)・古典「宇治拾遺物語」「尼地蔵見奉ること」
			誰が文化を創造するか	創造性	空間的・時間的位置づけ	文化の創造は、時代背景と関わり、元ある文化の上に築かれ、つながっていく	『平家物語』『敦盛の最期』
			人とのつながりー手紙を書いてみよう	コミュニケーション	アイデンティティと関係性	人は、人とつながり、人から学ぶことができる	「手紙で伝えよう3 きちんとした手紙」(白石範孝)
			心の中の種の芽生え	変化	空間的・時間的位置づけ	つながりの変化が新しい視点を生む	小説「種をまく人」
			つながりの中で生きる	つながり	アイデンティティと関係性	文学は、人間の感情や思考を言葉によって芸術へと変化させ、作者の創作意図を後世へと伝えていく	戯曲「花いちもんめ」
			文学における「型」の意味を追究する	創造性	個人的表現と文化的表現	短歌における五七五の定型は、自由で独創的な表現を目指す文学作品の理想とは相容れないのではないかという問いにどう答えるか	短歌「短歌十五首」ほか近現代短歌
			文法の役割を考える	システム	空間的・時間的位置づけ	言語の構造(システム)は一定のルールによって働く	文法(品詞・用言の活用)
表現するとはどういうことを考える	創造性	空間的・時間的位置づけ	朗読劇の制作と鑑賞を通して、作品に描かれた場面設定や人物像をより精緻に構造化する	小説「走れメロス」(太宰治)			

図2 <3年～4年 実践単元一覧>

学年	科目	単元	Key concept (重要概念)	Global context	Statement of inquiry (探究テーマ)	使用した教材とその著者(教科書教材には下線) (副教材・参考資料として使用したものも含む)
3 (中3)	国語	対話の意味を探る一詩「最初の質問」(長田弘)を通して	コミュニケーション	アイデンティティと関係性	言葉による問いや答えは私たちの社会や世界への「理解」を示している	詩「最初の質問」(長田弘)・ぼろぼろな駝鳥
		言葉の獲得と共有ー随想「言葉の共有」	共同体	アイデンティティと関係性	言葉を共有することは人の成長に影響を与え、共有された言葉は時間や空間を超えて社会で継承されていく。	随想「言葉の獲得と共有」
		パブリック・スピーキング	コミュニケーション	個人的表現と文化的表現	責任感と信念のある言論は新たな世界を拓き、平和に寄与する	話す・聞く1世界に届ける言葉「パブリック・スピーキング」・スピーチ動画(セヴァン・カリス・スズキ/エリザベス女王/マララ・ユスフザイ/グレタ・トゥンベリ)
		文字を創造することの意味と影響	体系・文化	グローバル化と持続可能性/空間的・時間的位置づけ	文字や言語の体系は私たちを取り囲む世界への認識を表している	文字を見抜く1表面文字と表意文字・ケータイ絵文字についての解説文・Ted Talk動画
		戦争を語る・人間を語る	ものの見方	個人的表現と文化的表現	歴史的な文脈は文学作品に状況に生きる人間の生を描き出し、読者の歴史観と人間観に影響する。	小説「握手」「輝ける闇」
		体験を語ることの意味①	関係性	個人的表現と文化的表現	複雑な事象に対する理解は、虚実を含む関係性の中で深まり、発展する。	小説「黒い雨」
		価値観や文化の源はどこにあるか	ものの見方	個人的表現と文化的表現	人間のものの見方は風土や歴史に影響を受けて規定される	評論「ディズニールンドという聖地」・古典「枕草子」
		体験を語ることの意味②	関係性	公平性と発展	複雑な事象に対する理解は、虚実を含む関係性の中で深まり、発展する。	「苦海浄土」
		古典に見る文化の継承と発展	文化	時間的・空間的位置づけ	時間・空間を超えて継承された文化は、新たな創造と変化を生み出す	「おくの細道」・漢詩
		アイデンティティの存在一詩を通して対話の生み出す作用	つながり	アイデンティティと関係性	つながりの中にアイデンティティは存在する。	詩「存在」(山之口鏡)
		短詩型文学「俳句」の可能性	創造性	個人的表現と文化的表現	自己表現は制約によって創造をもたらし、意味の可能性を広げていく。	俳句「俳句十五句」
		和歌ーつながりは、時間を超える	つながり	空間と時間的関連性	つながりは時間を超えて、受け手の中で広がっていく。	「歌の源流へー方葉集・古今和歌集・新古今和歌集」
人間にとって感情とは	コミュニケーション	アイデンティティと関係性	人は、コミュニケーションによって感情を知り、その感情が人間を成長させる。	小説「寂しいお魚」・詩「峠」(真壁仁)		
4 (高1)	国語総合 (現代文分野)	コトバのセカイ	ものの見え方	空間的・時間的位置づけ	見えている「世界」は「言葉」によって形作られている	鈴木孝夫「ものことば」(評論) 樽島忠夫「語と意味」(評論)
		リライト	変化	個人的表現と文化的表現	表現の変化は作品のメッセージを変える	アニメーション「Silly Symphony The Grasshopper And The Ants」(アニメーション動画) 佐野洋子「ありとぎりぎりす」(小説) 芥川龍之介「羅生門」(小説) 「今昔物語集」【羅城門登り屋見死人姿入語】 山崎正和「水の東西」(評論)
		異文化コミュニケーション	コミュニケーション	アイデンティティと関係性	文化への理解は、コミュニケーションのあり方に影響を与える	高階秀爾「『間』の感覚」(評論) 山本健吉「日本の庭について」 狩野敏次「住居空間の心身論ー『奥』の日本文化」
		インスタントフィクション	形式	個人的表現と文化的表現	物語の面白さは構成や展開のあり方といった優れた形式に支えられている	夏目漱石「夢十夜」(小説) 植田まさし「コガちゃん」(四コマ漫画) 田丸雅智のショートショート作品
	国語総合 (古典分野)	価値観の違いを捉える	時間、場所、空間	空間的・時間的位置づけ	個人の価値観は、社会的文脈によって形成され、また社会的文脈を生み出す。	『宇治拾遺物語』「絵仏師良秀」
		故事成語の比喩を読み解く	文化	個人的表現と文化的表現	多種多様な故事が、成語や比喩表現となって、言語生活を豊かにしている。	『戦国策』「漁父の利」「狐虎の威を借る」
		随筆から何を読み取るか	ものの見方	個人的表現と文化的表現	「古人」は一括りにできるものでなく、一人ひとり個性を持った書き手である。	『徒然草』「静かに思へば」
		歌物語の構成	文化	グローバル化と持続可能性	和歌に着目し、物語の構成や特徴を捉えることができる。	『伊勢物語』「芥川」「筒井筒」「大和物語」「沖つ白波」
		史伝から人物像を考える	ものの見方	空間的・時間的位置づけ	史伝から当時の人々の考え方や生き方を捉える。	『十八史略』「臥薪嘗胆」
		漢詩の多様性	創造性	個人的表現と文化的表現	何かを表現するためには内容だけでなく、形式や技法との関係が重要である。	漢詩「黄鹤楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」「春望」

図3 <5年～6年 実践単元一覧>

学年	科目	単元	Key concept (重要概念)	Global context	Statement of inquiry (探究テーマ)	使用した教材とその著者(教科書教材には下線) (副教材・参考資料として使用したものも含む)
MYP 対象外の 学年	現代文B	「世界」を見る				長田弘「アイオワの玉葱」(評論) 鈴木孝夫「ものごとば」(評論)
		「私」とは				中島敦「山月記」(小説) 太田省吾「見る」(評論)
		「読む」ということ				内田樹「物語るといふ欲望」(評論) 夏目漱石「ころ」(小説)
		行動「する」ために				丸山眞男「『である』ことと『する』こと」(評論) 夏目漱石「現代日本の開化」(評論)
	古典B	和歌に関する説話を読み比べる				『古今著聞集』「小式部内侍が大江山の歌の事」 『沙石集』「歌ゆゑに命を失ふ事」
		寓話の主張を読み解く				『韓非子』「逆鱗」
		理想の政治とは				『十八史略』「鼓腹撃壤」『戦国策』「戦勝於朝廷」
		時代背景と社会に対する見方の関わりについて考える				『方丈記』「安元の大火」『枕草子』「すさまじきもの」 「村上の先帝の御時に」
		人物の関係性に着目し、人物像を分析し、表現する				『大鏡』「花山天皇の出家」『史記』「鴻門之会」 『四面楚歌』
		和歌はどのような役割を果たすのか				『建礼門院右京大夫集』「資盛との思ひ出」 「悲報到来」
MYP 対象外の 学年	現代文B	常識を疑ってみる				尼ヶ崎彬「姿 日本のレトリック」 見田宗介「南の貧困/北の貧困」 岩井克人「貨幣共同体」
		日本の「近代」				森鷗外「舞姫」(小説)
		世界をとらえる視点				木村敏 「ものごと」 藤田正勝 「哲学のヒント」 若林幹夫 「地図の想像力」
		他者との関わり				野家啓一 「対話的相互性」の地平 野矢茂樹 「他者の声 実在の声」
	古典B	人間の思想と社会～SDGsは実現可能か～ 永遠の愛はあるか				『論語』『老子』『荘子』『韓非子』 『源氏物語』『桐壺』『若紫』
		語りの構造とその効果				『和泉式部日記』『夢よりもはかなき世の中』 杜甫「石壕吏」
		現実と非現実の境界				『雨月物語』『浅茅が宿』
	古典A (古文)	交わす言葉				『源氏物語』『くれまどふ心の間』『かかやく日の宮』 『鹿院の怪』『車争ひ』
		人物関係を解きほぐす				『大鏡』『時平と道真』『宣耀殿の女御』『中宮安子の嫉妬』
	古典A (漢文)	人生の選択				『史記』『陶朱公范蠡』『韓非子』『荘子』『老子』、 『陶淵明集』『五柳先生伝』
国語表現	愛の形				『離魂記』『人面桃花』	
	対比を作る				ディスカッション・小論文	
	展開に変化をつける				ディスカッション・小論文	
	抽象的な説明と具体例				ディスカッション・小論文	
	複数の文章の関係をつかむ				ディスカッション・小論文	
	物語を作る				プレゼンテーション・ディスカッション・創作	
	しゃべる技術(発表分析)				スピーチ動画分析・レポート	
ファシリテーショントレーニング				ファシリテーション実践・レポート グロービス・吉田素文「ファシリテーションの教科書」		

2章 授業の実践

1節 古典B(6年)授業

ここでは、公開研究会ではない普段の授業実践について、6年生(高校3年生)の古典Bにおける実践を報告したい。

本校には海外での生活体験のある帰国生が多く、国語、特に古典に対して苦手意識を持つ生徒が

少なくない。一方で、6年の授業ともなると、生徒の中に受験への意識が一層芽生え、文法事項や解釈にこだわる生徒が増えてくる。そうした中で、生徒たちが主体的に本文を読み、自らの思考を働かせ、的確に表現することを意識した授業を実践した。授業の具体的な内容は、「現実と非現実」がどのように描かれているかを探る、というものである。

使用教材は①上田秋成『雨月物語』から「浅茅が宿」、②村上春樹「レキシントンの幽霊」を主として用い、補助教材として③三島由紀夫「小説とは何か」、④柳田国男『遠野物語』、⑤水野葉舟『趣味』から「怪談」、⑥谷崎潤一郎『文章読本』などの文章のほか、⑦カナダの画家であるロブ・ゴンサルヴェスの絵などを資料として提示した。以下、各時のねらいと、大まかな流れを記す。

第1時：名文とは何かについて考える

・教材①の特定部分（亡くなった宮木の霊と勝四郎との出会いの場面）を、⑥を参考にして読み直し、名文たる要素を探ることで、表現のあり方について考える。

第2～4時：現実と非現実の境界について考える

- ・⑦の絵（トリックアートのような絵）を複数提示し、現実と非現実について考える。
- ・第1時で扱った①の特定部分について、現実と非現実について考える。
- ・③④⑤の文章を読み、非現実の世界を現実たらしめている表現のあり方について考える。

第5～6時：「何を」「どのように」表現しているかを考える

- ・①と②の比較を通して、共通点と相違点を考える。
- ・非現実の世界を描くための表現のあり方と、それぞれの作品・作者の特徴を探る。

このような流れで①と②を比較分析し、評価課題としてレポート作成を課した。レポートの課題および評価基準は以下の通りである。

『浅茅が宿』と『レキシントンの幽霊』の二作品について、以下の【1】～【3】の中から1つ選び、比較・分析せよ

【1】文学作品において、登場人物の心境を描くときに、直接的に表現しないで間接的に他のもの（自然描写、視覚的光景、皮膚感覚等）を使って表す場合が多く見られる。どのような場合にそういった技法が使われるか。また、それはどのような効果を生んでいるか。二作品から例をあげて比較して述べよ。

【2】作者はどのような技法を用いて、独自のスタイルを作り上げているか。また、その独自のスタイルは作品にどのような影響や効果を与えているか。二作品から例を挙げて比較して述べよ。

【3】物語や小説において、イメージやシンボル（＝象徴）やモチーフ（＝題材）が用いられていることがある。それはどのような効果をあげているか。「イメージ」「シンボル」「モチーフ」のうち一つまたは二つを選び、二作品から例をあげて比較して述べよ。

レポート課題評価規準

評価規準 B [分析]：作者の選択についての認識

- 生徒の分析は、作者の言語、構成、技法（テクニク）およびスタイル（文体）に関する選択がどのように意味を形成しているかについて、どの程度の認識を示しているか。
- 0 成果物は、以下に記す基準に達していない。
 - 2 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、事実上まったく参照がなされていない。
 - 4 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、いくつかの参照がなされているが、分析はなされていない。
 - 6 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、十分な参照と、多少の分析がなされており、多少の認識を示している。
 - 8 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、優れた分析と認識が示されている。
 - 10 言語、構成、技法およびスタイル（文体）がどのように意味を形成するかについて、非常に優れた分析や認識が示されている。

評価規準 C [構成]：構成と展開

- 考えの提示の仕方は、どの程度、効果的に構成されているか。また、どの程度、一貫性があるか。
- 0 成果物は、以下に記す基準に達していない。
 - 2 考えは、ほとんど構成されておらず、一貫性が事実上まったく見られない。
 - 4 考えは、一部構成されているが、一貫性が欠如していることが多い。
 - 6 考えは、十分に構成されており、多少の一貫性もある。
 - 8 考えは、満身に構成されており、一貫性がある。
 - 10 考えは、効果的に構成されており、非常に優れた一貫性がある。

2 節 レポート課題を通じて見えた生徒の理解

今回のレポート課題の内容と評価は、本校のDP日本語Aでの取り組みを意識して課したものである。課題のテーマとして3つ挙げ、その中から1つを選んでレポートを作成することになっているが、どのテーマを選択しても考える内容はほぼ同じとなるよう工夫したつもりである。

本実践は古典Bの授業ではあるが、古文の文章を読む力を身に付けさせることが第一のねらいではない。文法事項や古文単語などに重点を置くのではなく、現実と非現実の境界を探ることを通し

て、表現者が「何を」「どのように」表現しているのかを捉える力を身に付けさせることに眼目をおいた。その成果は、実際の生徒のレポートから窺い知れると思われるので、以下に一例を載せておく。

② 作者はどのような技法を用いて、独自のスタイルを作り上げているか。また、その独自のスタイルは作品にどのような影響を与えているか。2 作品から例を挙げて説明せよ。

『雨月物語』の「浅茅が宿」と『レキシントンの幽霊』には、現実世界と非現実世界を利用したメッセージの伝達という共通する技法がある。どちらも、優れたストーリー構成により、現実世界と非現実世界を行き来するような不思議な空間を描き、主題を作り上げ、メッセージを暗示していると考えられる。

『雨月物語』「浅茅が宿」に関しては、現実世界と非現実世界を描く、その怪奇性を利用したこのストーリー構成の工夫は、作者である上田秋成が考える人間性についてと、求める理想の女性像を表すためだと考察する。現実空間と異空間を存在させ、ストーリーで描く非現実的な世界を現実なものではないかと読者を錯覚に持ち込み、その空間の境界をあやふやなものにする文学的技法が使われている。その怪奇の構造を借りて、その当時の社会では女性の意思や感情を自由に発揮することが認められていなかったことを示しながら、上田秋成にとって望ましくも美しい人間性を描くことが可能になったのだと思う。

「浅茅が宿」では物語空間として二つの空間が設定されている。一つは勝四郎が経済的な理由で故郷を離れて商売のためにおもむいた京都という空間であり、もう一つはあとに残された宮木が夫の帰りを待つ故郷という空間である。二つの空間は離れているだけで、同じ物語空間に存在し、どちらも現実空間のように見受けられるが、宮木がいるとされる故郷は、京都とは違う異空間として描かれている。冒頭の「疫病盛んに行われて、屍はちまたに積み」という記述から、故郷では、死者のみしかいないような陰鬱な雰囲気がある空間だということがイメージできる。また、「古里に捨てし人の消息をだに知らで」という勝四郎の言葉から音信普通の状態であったことが読み取れるため、京都と故郷は同じ物語内の空間ではあっても、互いに完全に断絶された空間だということがうかがえる。

さらに、作者は、勝四郎を現実空間から異空間へ入り込ませるためにさまざまな仕掛けを施している。まず、「このとき、日ははや西に沈みて、雨雲は落ちかかるばかりに暗けれど、久しく住み馴れし里なれば迷ふべうもあらじと、夏野分け行くに」という部分に注目すると、いきなり場面設定が暗くなっているのに気づく。故郷までの道が深い闇に包まれているという表現を使用することで、2つの世界を分けているのではないだろうか。このお湯な仕掛けによって、2つの空間が互いに異質なものとなり、勝四郎を異空間へと送り込む。そしてその後、勝四郎はその異空間で宮木と再会するが、宮木が孤独と窮乏に苦しんできた断面をうかがわせる宮木自身の語りのなかで「狐・ふくろふを友として」という表現がある。狐やふくろふは昔から日本では霊的なものとされ、霊的な非現実世界と現実世界を往還する動物とされていることから、宮木すでに死んだ存在であり、霊魂として勝四郎の前に出現していることを暗示していると考えられる。このように、上田秋成は地理的に離れているだけだった、2つの空間を現実空間と非現実空間のように描き、非現実世界の中で現実との境界がわからない状態を作り上げている。

以上のような形で、怪奇性をストーリー構成の技法として用いていると考えれば、読者の恐怖

を煽り、不思議な感覚を作り上げていると考えるのが普通だ。しかし、「浅茅が宿」は、読者に恐怖をおぼえさせながら、その恐怖を通して人間性への抑圧がいかにか卑劣なものなのかを示すことを意図したものではないと私は考える。その意味では、いわゆる怪奇物語ではないと思っている。むしろ、怪奇の構造を借りて、現実ではあり得ないものの描写を可能にしているのではないだろうか。作中世界の怪奇あるいは幻想の存在は、それ自体に目的があるのではなく、それらの非日常的存在を通じて、抑圧されて歪んだ人間性、またはこの世には存在しない人間性を表し、人生にとっていかなる意味をもつか、その真実を追い求めようとするところにある。また、上田秋成の求める女性像として宮木を利用するという意図が含まれていたことも考えられる。

このように、現実世界と非現実世界の往還を利用した怪奇性の仕掛けをストーリーの構成に盛り込み、現実では見られない人間の裏表を表し、抑圧されて歪んだ人間性、また、人間の理想的な姿というものを暗示していることが『雨月物語』の「浅茅が宿」の独自のスタイルだと考える。

『レキシントンの幽霊』においても、現実空間と非現実空間の2つ世界で展開するストーリーが特徴的であり、その技法を用いることで筆者の死生観（メッセージ）を表現していると考えられる。前半で僕が異世界で幽霊に遭遇した話、後半でケイシーが語る不思議な話で構成されているストーリーの中では、眠りと目覚めが2つ現実と非現実の空間の往還に関係していることが共通している。前半と後半の二つの話を、まったく脈絡のない、相互に独立した二つの話と見なすことはきわめて不自然と言わざるを得ない。しかし、前半というのは眠ることで異世界（死者の世界）へ行き、目覚めることで現実世界に戻ることを示し、後半のケイシーの話でその意味を語っているという見方が可能である。これは、人間というのが現実の世界と非現実の世界との間を行き来する存在であることを示しながら、その非現実的で暗い世界は、自分の外部にあるのではなく、自分の中にあることを暗示していると考察した。このようなメッセージを込めるためには、現実空間と非現実空間の2つ世界を成立させ、非現実的な空間を死者の世界として利用せざるをえなかったのだろう。

まず、このストーリーの前半で、現実世界と非現実世界がどう描かれているかについて説明する。この物語は「これは数年前に実際に起こったことである。事情があつて、人物の無雨だけは変えたけれど、それ以外は事実だ。」と始まる。この話が現実世界でおきた事実であることを冒頭で述べることで、この話の舞台が私たちの生きる世界と同等であることを示している。ここで現実世界という設定を示すが、その後の幽霊の出現や行方不明のなどが現実とは違う異世界を描き、玄関ホールから居間に通じる扉が閉まっていることなどから、現実と非現実の境界が不明となる。また、異世界が出現するが、「目覚めたとき、空白の中にいた。」という記述やパーティーをしていることから、その異世界の描き方は明るく、空間的な不思議な展開であるという以外は闇をあまり感じない。これは、非現実世界ではあるものの、現実と同様の明るさを演出し、現実なのではないかという錯覚を作るためではないだろうか。非現実世界こそが現実だという錯覚を作り上げることで、境界をぼやかしているのだろう。また、眠りが、異世界への入り口となっていることを示している。その非現実的な世界で見る幽霊に関しては、後半部分を通してその意味がつながる。

後半のケイシーの両親の死についての不思議な話でも、現実世界と異世界が展開されている。父が母の死で深い眠りにつき、ケイシーは父同様に、父の日の時に深い眠りについた。その深

い眠りが、異世界への入り口となっていて、「眠りの世界が僕にとってほんとうの世界で、現実の世界はむなしい仮始めの世界に過ぎなかった。」と言っていることから、眠りについて先を別の世界として捉えていることがわかる。そして、その異世界というのが死者の生きる世界であり、それを現実の世界として信じたいという思いがある。

これは、「つまりある種のものごとは、別のかたちをとるんだ。それは別のかたちをとらずにはいられないんだ。」という記述からも読み取れることである。この言葉は、ストーリーの流れの中では、近親者を喪った深い悲しみは、涙ではなく深い眠りという別のかたちをとって現れるということを示していると理解することができるだろう。不可避の運命のように訪れる深い眠りは、悲哀が別のかたちをとって現れたものなのだ。そして、その深い眠りというのは、現実世界での出来事を理解できず、異世界（死者の生きる世界）に侵入し、それを現実としてみているということなのだと考える。前半部分と重ねて考えると、僕が非現実世界で感じた幽霊という存在は、現実世界で死者となった人たちだということが考察でき、ストーリーがつながる。

以上のことから、村上春樹は、人間は死んで無に帰するのではなく、現実とは異なる世界で生き続けるものだという死生観を表現するために2つの空間を技法として利用していることがわかる。

『雨月物語』の「浅茅が宿」と『レキシントンの幽霊』、どちらにも現実空間と非現実空間をストーリー構成に効果的に利用し、メッセージを暗示している。それぞれで、2つの空間を区別する（境界を作る）ための表現は少し違うものの、どちらもはっきりとした境界はなく、自然と空間が往還している。そして、その異空間の存在によって、読者へのメッセージの伝達が可能になっている。その異空間の存在をどう作り上げるか、そしてその非現実世界の存在をどうメッセージ伝達に利用しているかで、独自のスタイルを築いていると考える。『雨月物語』の「浅茅が宿」では、現実と非現実世界を利用して、現実には存在し得ないものの描写を可能にし、それが現実なのではないかという錯覚を作り上げることで、上田秋成の考える抑圧されて歪んだ人間性、また、人間の理想的な姿を表現している。一方で、『レキシントンの幽霊』では、現実とは違う異世界空間を作り上げることで、死者が生きている世界観を作り上げ、村上春樹の考える死生観を繰り広げている。

School Year 2020 Report on Japanese Language Division Practice

Abstract

As shown in the table, the Japanese Language Division conducted classes based on units designed focusing on a concept for each grade as an initiative for SY2020. In MYP, we carried out classes while sharing key concepts, related concepts, global contexts, and statements of inquiry based on them with students. In addition, we gave lessons online and practical classes aiming to link with other subjects.